



ひもの箱をリメイクして製作されたテーブルを会場に置き、沼津が誇るアーティストたちが一堂に集結。和食・中華・フレンチ・イタリアンの料理人がコラボし、地元の素材を活かした抜

ける度に、話をする相手や場所を問わず「沼津」というフレーズを30回以上使うんだというエピソードを話していた。日頃から沼津愛を語っていた藤原さんは、かねてから「みんなの力が集まったらすごいことになる」「沼津の力を集めれば、もっと沼津を好きになるんだ」とも言っており、2012年の自慢フェスタの会場の一角で、その想いを具現化するまでに至りました。



写真右端が藤原さん。2014年の自慢フェスタにて

藤原慎一郎さん。岡宮にある建築デザイン事務所「ケンブリッジの森」の主宰であった空間デザイナーです。ご本人にお話を伺いたいところですが、残念ながら2015年の自慢フェスタを迎える3カ月ほど前に急逝されました。



沼津の中心で自慢を叫ぶ

暦は秋となりながらも、まだ暑さの残る9月6日から8日の3日間。中央公園とかがわ風のテラスを会場に、沼津自慢フェスタ「THIS IS NUMAZU」が開催されました。「イベント」としては変則の、木曜・金曜・土曜と平日を絡めた曜日での開催であり、アルコールを提供する催しであるにも関わらず、終幕は少し早めの21時。

会場となった中央公園に出店するお店だけでなく、路面店や小さなビルの上階にあるような席数の多くないお店にも、自慢フェスタのテーマのひとつである「世界一の美酒美食」が詰まっているため、開催日時には「仕事帰りに中央公園でほろ酔いになったら、街なかに繰り出して2軒目、3軒目」と、もっと沼津の夜を楽しんで欲しい」との理由が込められているそうです。

沼津自慢フェスタのはじまりは、沼津のいいものを集めた「沼津自慢屋」という小さなお店の小さなお祭りでした。街なかで沼津自慢を繰り広げていたアンテナショップが、仲見世商店街の一角にテーブルとベンチを用意して地酒やクラフトビールを振る舞う手づくりのビアガーデン。翌年から舞台を中央公園に移した理由は、会場の大きさだけではありません。沼津の真ん中の、公園という誰でも訪れることのできる公共空間こそ市民の皆さんの日常とながっている場所だからという理由も

群の料理を提供する。高校生ボランティアが給仕を手伝うなど、日常にある沼津の魅力をきゅつと集めて丁寧にパッケージ化したこの舞台こそが自慢フェスタの会場内に藤原さんが仕立てた、シンプルに沼津を自慢する「THIS IS NUMAZU」です。黒と白で整えられた会場は現在も受け継がれており、自慢フェスタを思い返したり、楽しみにしたりする際に多くの人がイメージするヴィジュアルアイデンティティになっているとも言えるでしょう。

公園に咲いた傘の花

例年、雨に打たれることは想定しているものの、今年ほどに強く悩ましい雨は歓迎すべきものではありません。最終日には1時間前倒しにお開きとなり、楽しみにしていたいくつかのパフォーマンスも披露されずにお蔵入りとなってしまいました。

実行委員長の秋山博則さんは「何もここまで降らなくてもいいんだけどな



雨でも自慢フェスタを楽しむ様子が見られました

あるそうです。パークウンターやオブジェ、ステージなど沼津自慢フェスタならではのシンブルで格好いいしつらえが撤収されて、普段の姿に戻った公園にふと足を運んだ時に、あの3日間が日常とリンクしていると思いつくことができるということから、自然と中央公園に決まったと言っても過言ではありません。



芝生スペースでワークショップなども開催されました

沼津を、すごく誇る人

少しずつ認知を得て、今では沼津市の人口の10%ほどの来場者を集めるまでの規模となった沼津自慢フェスタですが、不思議なことに必ずと言っていいほど雨に降られてしまいます。

開催時期もひとつの要因ではあります。自慢フェスタに関わる誰かが雨雲に好かれてしまっているのではと想像すると、ひとりのキーパーソンにたどり着きます。

あ、とさすがに空を恨めしく思いましたよ」と苦笑い。ただ、雨が強くなると会場が呼応したかのように色とりどりの傘の花を咲かせ、そそくさとテーブルを離れてしまおうという人たちよりも「小雨にならないか粘ってみる」とその場にとどまる人たちが多く、中にはアウトドアで使うようなレインポンチョをさつと身に纏い、何事もなにかのようにテーブルのうえの料理や飲み物を楽しみ続けるというツワモノも散見されました。

そんな光景は、気分が良くなりその場を離れまいとするだけではなく、「これしきの雨と天秤にかけたら、自慢フェスタを楽しんだ方がよっぽど有意義だ」と判断した人が多いことの表れに他なりません。狩野川階段堤も会場となっていることから雨は安全面でも不安のひとつでした。それでも、ボランティアスタッフや会場を案内するコンシェルジュが「足元に気をつけて」と声かけをし、多くの来場者を集めた会場でも大きな混乱はありませんでした。

その様子には、実行委員の皆さんも「なんでみんな帰らないんだろう」と思ったり。屋根などもなく申し訳なく思うと同時にそれほど愛されているんだなと嬉しかった」と新しい発見があったそうです。沼津で暮らす毎日には晴れの日もあれば雨の日も風の日もあります。天候すらも一緒に満喫できるのは日常のための特別な3日間だからなのではと思います。